
聖女物語 ~ ~ ~ 世界編 ~ ~ ~

キンカラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女物語――世界編――

【Nコード】

N7315M

【作者名】

キンカラキ

【あらすじ】

人生に絶望した高校一年生、神奈千春、ある時彼女は、人類救済projectというサイトを発見する。

いかにも怪しいサイトであったが、自暴自棄になっている千春は、適正検査を受けてしまう。

そして、適正ありと診断された時、彼女は自分の人生のすべてをかけるほどの重大な選択をせまられる。

序章（前書き）

すいません前書きが長いです。超長いです。興味がない方は飛ばしてしまってください。

ただ、もしも序章を読んで少しでも興味をもたれた方、この前書きに聖女物語の大まかな概要、そしてテーマが書かれているのでよろしく願いますm（――）m

（ていうか、あとがきに書けばよかったような気が・・・？）
こんにちは、キンカラキと申します。

小説家になろうのユーザーの方々、そうでない方々もこの小説に立ち寄っていただいてもありがとうございますm（――）m
素人が書いた稚拙な文章ではありますが、皆様の心に少しでも印象に残っていたければ幸いです。

さて、これから連載させていただきます聖女物語ですが、序章を読んでいただくと思うのですが、結構残酷な描写が含まれていることが多いです。

物語の性質上どうしても仕方のないものになってしまいました。

最初は学園物のほのぼの超能力バトルを描こうと思っていたのですが、どうにも設定の段階で話が壮大になっていつてしまったので、ほのぼのの項目は脳内消去させていただきました。

さて、序章でも書かれていますのですが、登場人物が使っている能力は超能力でも魔法でもありません。

この辺は物語の重要な伏線なので、詳しくは書くことが出来ませんが、ほかに表現するタグがなかったのでやむなく超能力のタグをつけさせていただきますました。

バトル物で残酷な表現が多い、物語を読んでいると、いったいどの辺りが聖女物語なんだ？って思う方もいるかと思いますが、最初から聖女な主人公なんてありえない。

最初から聖人君主な人間なんて不気味なだけだと思います。

この物語に登場する人物のほとんどは暗い過去、人間くさい悩みを抱えています。それは他人にとってはたいしたことなくても、当人にとってはまさに人生に立ちふさがった大きな壁であり、また限りなく深い溝でもあるのです。

この作品のテーマは2つあります。

1つは人生の選択。

あの時にあの選択をしていれば今頃は別の人生を歩んでいたはずだ。

なぜあの時ためらってしまったのだろう。

もつとあの時頑張っていたら・・・

そんな過去が読者の皆様にもあると思います。

ですが、それでも、自分が選んできた道だから、そう言い聞かせてここまで的人生を歩んでこられたと思いますし、これからもそうであると思います。（もちろん自分もです）

さて、この人生の選択は言うまでもなくそれそのものが人生であり、くつがえすことの出来ないものです。

ですが、あの時の自分にとっては深く考えることなく、些細なものであっても、今思えば、重大なことであり、深く後悔をしている方もいると思います。

それはたとえ、軽いすれ違いであったり、軽い親切であったりとか、ですが、それがきっかけで何が起こるのかはわかりません。

もちろん、何も起こらないことが圧倒的に多いでしょう、ですが、そのほば、すべてのことに自分以外の誰かが関わっていると思います。

人は他人によって縛られ、他人もまた、自分を含む誰かによって縛られています。

他人を傷つければ、自分も一緒に傷がつく、それは、大切な人であればなおさらのことだと思えます。

この話はそんな軽いすれ違いが起こってしまった。悲しくも優し

い物語なのです。

2つ目のテーマは人間の弱さです

さて、序章を読んでいただくとわかると思うのですが、いきなり2人の殺し合いから物語ははじまっています。

しかも片方は最初は逃げているだけで、殺意などはありませんでした。

ですが、絶体絶命の危機になると自分が助かるために、容赦なく殺そうとしています。

人が人を殺してはいけない、これはある、特定の時代背景時以外は、人間社会では当然のように定められたルールであります。

なぜ殺してはいけないか？そう問われると刑罰をうける以外の具体的な理由を説明できないかもしれません。

ですがそれをなしにしても、人殺しはいけない、ほぼすべての方がそう考えていると思います。

ですが人間とは弱いもの、そんな論理など、生命の危機、自我の危機の前には吹き飛んでしまうことがあります。

最初に殺そうとしている少女にも実は狂人になってしまったそれ相応の理由があります。（詳しくは後ほど本編で）

ただ、それは仕方がなかったとはいえ、やはり自己の弱さからきてしまったものなのです。

そしてその心の弱さは、たいていの場合が自分を守るために発揮される（つていえないのかな？）物と思います。

自分よりも他人を取ることが出来る人なんてめったにいないと思います。

かといって、仮にそれが出来たとしても、それが心の強い人、そうであるとはいえないとも思います。

本当の強さとは？そして、生きるということの真理とは？それが聖女物語の大筋のテーマなのです。

最後に主人公である神奈千春は、決して思いやりにあふれて、他人のために動く、そんな主人公体質ではありません。

どちらかというと、自己保身が強く、また、思考も幼い、さらに相当のネガティブな人間です。

ぶっちゃけ主人公失格です（爆）

しかしそんな欠点だらけの主人公が悩みに悩んで、時には間違いを犯しながらも、ある、ひとつの到達点にたどり着く。

聖女物語とはそんな物語なのであります。

この悲しく辛くそして苦しい、でも、どこか優しさのある聖女物語をどうかよろしく願います m (_ _) m

最後にこんなにも長ったらしい前書きを呼んでいただいてどうもありがとうございました m (_ _) m

序章

聖女物語

第一巻 日常と非日常の狭間の中で

序章

風の強い夜だった。

11月の半ばの夜は寒い。しかも強い風が吹いているとあれば、誰もが好き好んで外を出歩きたがらないだろう。そしてそれは、平穩に暮らしている人々にとっては幸運なことだったに違いない。

「ハア、ハア、ハア」

私はかつてない恐怖を感じながら夜の住宅街を走っていた。

息が切れる、苦しい、かつてこれほど真剣に走ったことがあっただろうか？ いや、ない。私の人生では初めてのことだ、というか、何者かに追われる経験も初めてのことだ。

そう、今私は追われていた。誰に？ わからない、初めて会ったわけではないが、顔を見たことがある。その程度の面識でしかない。それなのに追われている。いや追われているんじゃない。

命を狙われているのだ。

「どうしてこんなことに」

私は絶望を感じながらつぶやいた。

助けを求めて叫びながら逃げているのに誰一人として現れる気配がない。それも当然か。私は自動車並みの速度で走っているのだ、もしも仮に私の叫び声に気づいて駆けつけたところで私はとっくに見えないところまで進んでいるだろう。だが、それでも走りをやめることは出来ない。追いつかれたら殺されてしまう。あの異常者に。

むしろ誰も来ないほうが幸運なのかもしれない。誰かが駆けつけてくれればあの異常者はためらいなく殺すだろう。何とか逃げ切るしかない。

私はかすかな希望を胸に逃げ回っていた。でも、ここがどこなのか、まったくわからない。

かなりの時間走り回っていたせいか、まったく土地勘のない場所に迷い込んでしまった。たぶんここは私の住んでいた町ではないだろう。もしかしたら市を越えてしまっているのかもしれない。それにこの住宅街はまるで迷路のようだ。同じような風景ばかりでなかなか抜け出すことが出来ない。

私は不意に足を止めた。いや、止めざるを得なかった。

「行き止まり！！」

周りは塀に囲まれていた。前にも横にも通り抜けられるところはなさそうだった

「何で、こんな迷路みたいな道を作るのよ、ここに車が迷い込んだらどうするつもりなの」

私は精一杯の声で毒づいた、もはや頭が正常に機能していない。

頭の中がパニックになっている。

「あああ、みいゝつけたあゝ」

不意に後ろからうれしそうな声が聞こえてきた。その声はまるでねずみを追い詰めた猫のようなイメージを私に与えた。全身が逆立ち、震えを抑えることができない、追い詰められたねずみはこんな心境なんだろう。

まったく体が動かない、声を上げたいのに口がパクパクするだけだ。頭の中も真っ白だ。

シュゴ

幾度となく聞いた音がした。もう二度と聞きたくない音が。

「うあああああ」

私はようやく声を出すことが出来た、といってもこれは悲鳴ではない、痛みに耐えかねて全身から搾り出すような叫び声だ。

そう、あの音とともに私の体には風穴を開けられていた。今度はいったいどこを開けられたのかわからないくらいパニックに陥っている。

私は痛みのみあまり地面に転がりこみ、ようやく相手のいる方向を見ることが出来た。

先ほどからずっと私を追いかけてきた相手は中学生ほどの少女だった。綺麗でまっすぐな亜麻色の髪は肩までかかる程度、少々病弱そうに見えるが小さな顔で整った顔をしている、そしてなぜか病院の入院患者が着る服を着ていた。服はともかくここまでみれば可愛い印象を与えるのだろうが、血まみれの病院服と、狂気が宿った、としか言いようのない異常なまでに見開いたまぶたが、可愛いという印象を吹き飛ばし、怖いという印象を与えていた。

「追いかけてこも飽きちゃったから、足を射抜いたよお」

足？足を射抜かれたのか？ようやく私はこの激痛が足からきていることに理解をした。同時に私はもう先ほどまでのように逃げ回ることが出来ないことも。

「あは、あははは、あはははははははは。痛い？痛い？ねえ？痛いのお？」

狂気に満ちた顔で笑っている。狂人、というよりも人間とは思えない。

シュゴ

「ああああああ」

あまりの痛みに私は再び叫び声を上げた。今度は逆の足を射抜かれた。

いったい目の前の少女が何をしているのか？どんな凶器を使っているのか？最初はわからなかった。だがこうして対峙して攻撃を受けてみてようやくわかった。

風だ。風を束ねて光線のようにして打ち出しているのだ。

人体を貫通するほどの風、いったいどれほどの圧力で打ち出しているのか？

「あはははははあゝ、これでもうあなたは逃げる事が出来ないわねえゝ。さあ、遊びましょうよあゝ。きゃあははははあゝ」

シュゴ、シュゴ、シュゴ

「いやああああ」

風の光線が再び私の体を貫いた。

もう限界だ、私はこのまま死んでしまうのだろうか？こんな時漫画やアニメであればどこからかかっこいいイケメンが助けに来られるものなのだが、現実と空想は違う。どれだけ叫んでも誰も助けに来てくれない。

「どれだけ叫んでもむだよあゝ、あなたの貧弱な叫び声なんて私の風で吹き飛ばしてあげるんだからねえええゝ」

絶望的な言葉をかけられた。せめて私の死ぬ物狂いの叫び声を聞いて誰かが駆けつけてきてくれるか警察を呼んでくれるかもしれない、そう思っていたのに。

私、このまま死んでしまうのかな？死んだら誰か泣いてくれるのかな？嫌だよ、まだ死にたくない、死にたくない、死にたくないよあ。

「何をやってんのよあ、あんたも戦いなさいよあ、あんたも能力を持ってるんでしょあゝ」

能力？確かにある、これまで生きてきて、そんなものは空想の世界だけで現実にあるわけがないことを知っていた。だが、目の前の少女は確かに現実ではありえない不思議な力を使っている。現実世界でかろうじて通用する不思議な力といえば超能力だろう。しかしこの力は超能力とは思えない、どちらかというと魔法に近いような気がする、だが、魔法でもない。超能力とも魔法ともつかないこの不思議な力は確かに私にも宿っている。だが、こんな力で今の危機を脱出できるとは思えない。それに、私に宿ったのは能力だけではない。

人間本当に命の危機になると意外と冷静になるようだ、目の前の危機に対してどうすれば助かるのだろうか、今までの人生で発揮し

たことがないほどの集中力で頭がフル回転していた。

シュゴ、シュゴ

再び私の体を風の光線が貫いた。もう、私の体は穴だらけになっているとおもう。貫いた先から空気摩擦で傷口を焼いてしまうので出血がない。だから私は今まで生きていたのだ。そうでなかったらとつくに私は出血多量で死んでいただろう。

この耐え難い痛みを何とか押し殺し、私は地面に倒れこみ動かなかった。

「あれえゝ、もしかして死んじゃったの？それとも気絶をしちやったのかなあゝ？」

近づいてくる気配がする、そうだ、こっちに来い、逃げる事が出来ない以上、私の手の届くところにきてくれない限り私に勝ち目はない、ベタなおびき寄せの方法だがこれ以上の方法が思い浮かばなかった。

「だめよおゝ気絶なんてしちゃあゝ、あなたはもつともつと私と遊ぶんだからあゝ」

私の目の前まで来て私の頭を蹴飛ばした。いまだ。

私は死ぬ物狂いの力で起き上がり、目の前の少女を突き飛ばした。少女は思ったよりもずつと軽かった、そして私の予想をはるかに超えて遠くへと吹き飛んでいった。

まずい、思ったよりも遠くに離れてしまった。せつかく手に届く間合いまで近づいてきてくれたのに、私は、再び死ぬ物狂いの力で飛んでいった少女の下へと走った。

もはや足の痛みなどにかまっている余裕はなかった、とにかく死にたくない一心で少女の下へと急いだ。そして少女の下にたどり着くと仰向けに倒れている少女の上に座り馬乗りの形になった。

少女は混乱しているようでまだ自分の状況を理解していないようだ。今のうちにやるしかない。そう、殴り殺すのだ。今の私なら人間の体など簡単にこわすことが出来るだろう。私は覚悟を決めた。次の瞬間。

理解が出来なかった。一体何が起こった？私は助かるかもしれない。そう思っただけで、渾身の力で拳を振り下ろし、少女を絶命させたはずだ。それなのに、少女は無事で私は丁字路のところまで吹き飛んでいるのだ。

いや、わかっているはずだ、ただ、理解したくないだけで、そう、私は拳を振り下ろした瞬間に少女の起こした爆風に後ろから吹き飛ばされたのだ。しかも、この角度ならば本来は前のめりになるはずなのに、それすら許さないほどの圧倒的な風圧で。

私は理解をした。もう私に助かる道はないのだということに。

少女はいかにもがっかりしたような顔で私を見て、こういった「つまらない奴、……死ね」

それが私の聞いた最後の言葉となった。

序章の前日

第一話 序章の前日

ジリリリリリリ

目覚まし時計が、朝の訪れを告げた。私は半覚醒状態でベルを止める。

「まだ眠いなあ」

私はため息をついた。

本気でもう一度眠ってしまおうかと強い誘惑にかられたが、学校を無断で休むとまた面倒なことになるので、仕方なく準備を始めた。歯磨きをして、顔を洗い、制服に着替える。最後に眼鏡をかけて、ひと通り準備が終わり部屋から出て行くときに思わずつぶやいた。

「また今日も一日が始まってしまうのかあ」

はあ、ともう一度ため息をついた。

部屋を出てしばらく歩いていると、もうすっかりと冷たくなった空気が私の体を震わせた。学校まで徒歩で20分ほどだが、近づいてくるにつれて自分の足が重くなってゆくのを感じていた。

一人でとぼとぼと歩いていると後ろから私に向かって、かけてくる少女がいた。

「おはよう、神奈」

「あっおはよう、石原」
かみなちはる
神奈千春、私の名前だ。

そして今私に声をかけてきた少女が石原陽^{いしはらひょう}。私の数少ない友人と呼べる存在だった。

千春は出来る限りの愛想で振り向いて答えた。

「今日は寒いね、神奈」

「もう11月半ばだからね」

「今日の2時間目体育なのになぁ」

たわいのない話をしながら学校までの道のりを歩いていった。

千春は石原のことが友達だと思っているが、正直あまり好きではなかった。もちろん、嫌いではないのだが、千春の本当の心を話せるとは思えなかった。千春には石原にも、クラスメイトにもいえない秘密があった。

それは、自分がアニメ好きでゲーム好きなのだということだ。

別に後ろめたいことではないはずなのだが、どうにも世間はそういったことに冷たい感じがする。事実、何らかの犯罪があると、犯人の家には無数のゲームが、とか無数の漫画が、とかそんなニュースが報道されるイメージが沸くのだ。

実際はそんなこと言っているニュースなど、千春は見たことがないのだが、世間のイメージがすでにそうなってしまうているように千春は感じていた。

世間は、アニメやゲームに冷たいのだ。

千春はそう感じていたため、私はアニメやゲームが大好きな女の子なんですって、言うことができなかった。だから、もちろん友達の石原もクラスメイトも千春の本当の趣味を知らない。よって結局、石原の話にあわせるしかないのだ。

石原の話はつまらないわけではないが、本当の話が出来たらどんなに楽しいことだろうと思う。しかし、千春にはもう、そのことを絶対に言わないと心に決めていた。

あんなことはもう繰り返したくないからだ。

「聞いてる？神奈」

千春ははっとして答えた

「えっ！ああ、ごめんごめん」

「どうしたの、ボーっとしちゃって」

知らないうちに、心が過去にさかのぼっていたらしい。そう、千春のトラウマに。

「い、いやいや、なんでもないから」

「まさか、恋！」

「いやいや、全然違うよ、何を言っているの」
手をブンブン振りながら答える。

「その反応、あやしい」

石原はニヤニヤしながら返してきた。

「本当に違うよ」

本当に全然違うことなのに、ますます、あせりだした感情が石原を悪ノリさせた。

「あゝあゝ、どうかそのへんに彼氏、転がっていないかなあゝ」

ゴロゴロ転がっている彼氏なんてまっぴらごめんなのだが。

「彼氏、ねえ」

千春は重い気持ちで答えた。そうしている間に、千春の学校、清水ヶ丘高校にたどり着いていた。

「起立、礼、着席」

一時間目は古典、やばい、いきなり眠くなりそうな授業だ。眠い気持ちを抑えながら、黒板に書かれた文章を必死で書き写す。

古典なんて、社会に出たらなんの役に立つんだろう。そんなことを考えながら、あくびをかみ殺した。きっと、クラスメイトのほとんどもそう思っているに違いない。実際、何人かも眠たそうな顔をしていた。

結局みんな真剣なのは、テストで悪い点数を取らないためなのだ。まだ1年生だから、それほど、進路のことを考えたことはないが、授業の内容よりも、テストの点数が将来の役に立つなんてなんだかおかしい感じだ。なつて千春は考えた。

2時間目は体育だ。しかも、外で陸上だ。

「この寒いのにね」

石原は文句を言っていたが、千春は陸上で助かったと思っていた。

運動オンチの千春は集団競技が苦手だった。

どうせ、私のせいで迷惑をかけてみんなの機嫌を損ねるから、出来ればやりたくなかった。陸上ならとりあえず一人で走っていれば、迷惑をかけることはないから、みんなの目を気にする必要はなかった。3時間目は世界史。

千春は歴史は好きだった。

ゲーム、アニメ好きの千春にとっては、現実起きた歴史が、漫画や小説のストーリーみたいで面白かった。なのだが、2時間目が体育だったせいなのか、何人かの生徒は目が虚ろになって今にも眠ってしまいそうだ。

世界史の先生も注意する人ではないようなので、ますます生徒の怠け心が助長されていた。

「こんなに面白いのになあ、でも現実には魔法もモンスターも超能力もないんだよねえ」

千春は小声でつぶやいた。

すぐにはっとなり、誰かに聞こえてしまっただろうか、千春はあせりを感じてしまったが、誰にも聞こえた様子がなさそうなのでほっとした。ついつい、気が緩むと、心の中の言葉を口走ってしまうのだ。いけないいけない、気をつけないと、千春は心の中で気を引き締めなおした

お昼になり、石原とお弁当を食べていると。

「ねえ神奈、先週の間テストのことなんだけどさ」

「ん？なあに？」

「テスト範囲外の所が出ていなかった？」

「え？何の教科で？」

「数学」

「ああ、言われてみると、聞いていないところが出ていたかも」

「でしょ、これって先生のミスだね、訴えたら、点数修正してくれないかな？」

「そんなに、点数悪かったの？」

「親に怒られた」

「そうなんだ」

本当に当たりさわりのない会話だなあ、千春はそう思った。

アニメとかでは友達同士は下の名前で呼び合うことが多いのに、現実では下の名前で呼び合うことってあんまりないよね。そもそも、さんづけで呼ばなくなっただのも2学期からだし。夏休み中もほとんどあうこともなかった。

私と石原って友達なのかな？

千春は石原のことを友達だと思っている。だが、決して、親友ではないとも思っていた。だから、たとえ、石原が千春から離れていってしまったとしても、千春はかまわないと思っていた。

もう、下の名前で呼び合えるような、大切な親友は必要ないのだ。

「神奈」

「えっ、なに」

「どうしたの？ぼーっとして」

「えっあつごめん、なんでもないよ」

「本当に大丈夫？なんだか最近ぼーっとしていることが多いよ」

「ありがとう、でも、本当になんでもないから」

ここで、本当の自分の心境をいえたら、どんなに楽なんだろう。そうおもう、だけど、言えない。

世の中、本当に自分の本音で話せる、友人に出会える人なんているのだろうか？本当に心を許せる人に出会える人なんているのだろうか？

結局みんな、同じ場所にいる、そこそこ気の合う、友人になれそうな人を見つけ出して、共通の話題を探し、その枠内だけで会話をして満足しているふりをしているだけではないのかな？

そもそも、目の前にいる石原だって、なんらかの隠し事はあるとおもふのだ。私にも言えない、もしかしたら、家族にだって言えない隠し事があるのかもしれない。私にもあるように、きっと石原にも本当に言いたいことがあるのだろう。でも、それを言ってしまう

と今の関係が崩れてしまうのではないか？その恐怖心が、心にブレ
ーキをかけてしまうのだろう。千春はそう考えていた。

5 時間目 英語

この教科で千春は、先生に当てられてしまった。

普段からそれなりに真面目にやっている、千春にとっては、内容
自体は問題ないのだが、クラスメイトの注目を浴びてしまうことが
嫌だった。緊張してしまい、しどろもどろになってしまう。あああ、
頭の中が真っ白だ。

「先生、もう、許してあげてください」

不意にどこからか、声が上がった。同じクラスの黒田君だった。
クラス中にどつと笑いが流れる。

「そうだな、神奈、もう座りなさい、しっかりと勉強しておくよう
に」

先生がため息交じりで答えてきた。

別にわからないわけではないのに、千春は心でつぶやいた。顔
から火が出るかと思うくらい、恥ずかしい思いで席に座った。

千春は注目されるのが嫌いだった。

もともと、おとなしく、目立たない性格だったので、こういった
ことには慣れてないのだ。しかし、クラスの男子の中にはリーダー
シップをとりたがるような、黒田君のような目立ちたがりもいる。
どうしてもそんなにも目立とうとすることが出来るのだらうと、千春
はいつも不思議だった。目立ちたがりの黒田君はいつでも楽しそう
だ。うわさではバンドもやっているらしい。

あの人には悩みとかはないのかな？なんだか、少しだけ、うらやま
しいな、まあ、私には縁のない世界だけど。そう考えながら千春は
ため息をついた。

6 時間目も終わり、千春は帰宅の準備をしていると、珍しく石原
が声をかけてきた。

「一緒に帰ろう」

「あれ？、部活はいいの？」

石原は弓道部員だ。

「うん、今日はいいや、それよりも、神奈が最近元気がないのが気になってさ」

まったく、私にはもったいないくらい、よく出来た友達だな。千春はそう思った。でも、元気がないのは本当は最近じゃないよ。あの時からずっとなんだ。この季節になると、そのことを思い出してしまうから、でも、そのことは絶対に言えない。言わないと決めているから、私はもう

終わっている人間だなんてことは。

ごめんね、石原、千春は心の中で謝罪した。

「それで、どうして最近元気がないの？」

帰り道に一緒に歩いていると、石原が聞いてきた。

「どうやって応えよう？何かそれっぽい答えを言っでごまかすしかない。千春は覚悟を決めた。」

「うん、本当にたいしたことじゃないんだけど」

出来るだけゆつくりと会話をしながら、頭の中は、それっぽい答えを考えるために高速回転だ。不意に5時間目のことが頭をよぎる。「なんだか私って、クラスで浮いているなって思っ」

「はあっ？」

「うん、私っておとなしすぎて、本当はわかってる答えでも、まともに返すことが出来ないなって思っ、ほら、今日の英語の授業の時とか」

石原が隣で聞いている。

「私のこの性格が嫌いでさ」

そして、石原が言葉を返してきた。

「なあんだ、そんなことで悩んでいたの」

ちよつと意外な言葉が返ってきた。

「そりゃ、私は神奈の性格をよくわかってるつもりだよ、5時間目の時だって、あっ当てられちゃったって思ったもの、うまく応え

られるかな。って思ったけど、やっぱりダメだったわね」

「そりゃ、朝でも昼ごはんのときでも、あれだけばーつとしていたり、やそうなるわって思ったもの」

「つまり私が言いたいのは、あんた考えすぎなの。考えすぎるから、どんどん悪いほうに落ちていつていっているじゃない」

「頭の中だけで、シミュレートばかりしていないで、少し行動にうつしてみなさい」

石原が早口でまくし立てる。

「こっ行動に？」

千春は困惑していた

「そっ、行動に移すの、あんた、あのあと黒田君にお礼は言ったの？」

「いつ言ってないけど」

もじもじしながら千春は応える。

「ほら、黒田君は神奈を助けてくれたのよ、お礼ぐらい言っておくべきだと思わない？」

「そりゃ、男子に声をかけるのは勇気がいることだけど、そこから自分を変える一歩になると思わないの？」

「うっ、うん」

「ほら、明日お礼を言ってみなさい、あれこれ考えていないで、まずは行動してみなさい。石を投げないと水面に波紋は立たないのよ」

「ええっ！」

「やっぱり怖気づいてる、ほら、そんな地味な格好をしているから、中身まで怖がりになってしまふのよ。もう少し自己主張をしてみなさい」

「眼鏡も取ってみなさい、ほら、そんな地味な髪型もしてないで髪を結んだりとかしてみなさい」

「あんたもつたいたいじゃない、結構可愛いのに、そんな地味な格好をしているからクラスの男子は誰も見向きもしないのよ」

「恥ずかしいよう」

千春は顔が真っ赤だ。

「すぐに変わりなさいとは言わないわ、でも、せめて明日黒田君にお礼ぐらいは言いなさい。私も後ろでついてあげてあげるから」

「うまくいけば、黒田君と仲良くなれるかもしれないわよ。ほら、黒田君って結構女子に人気があるのよ。」

「もしも、仲良くなれて、うまく行ったら最高じゃない。あんたも彼氏が出来れば、変わると思うわよ。ほら、女って恋をすると美しくなるっていうじゃないの。」

自分だって付き合ったことないくせに、千春は心の中で軽く毒づいた。

「あつ、もうこんなところまで来てた。私行くね。じゃあね、神奈。」

好き放題喋りまくって、石原は自宅のほうへ駆けていった。

千春は一人になり、とぼとぼと歩いていた。頭の中は先ほどの石原の言葉で一杯だ。

「彼氏、か。」

「石原には悪いけど、私には彼氏なんて必要ないなあ。」

「つつい千春は独り言をつぶやいていた

「私にはもう、幸せなんて、いらないから」

空にうつる夕焼けはどこまでも赤かった。

「なんだかなあ」

千春は思いつきため息をついた。

「いつたいつからこうなってしまったんだろう」

いつからなんて、わかりきっている。そう、あの時からだ。私の

人生が終わった、あの時

「瑞希」

千春は無意識にその名前を呼んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7315m/>

聖女物語 ~ ~ ~ 世界編 ~ ~ ~

2010年10月8日13時32分発行